

第14期 足立区社会教育委員会議

報 告 書

【テーマ】

「地域の教育力向上、青少年の育成に向けた新たな方策」

ちいきを元気に！

子どもたちをもっと元気に！！

足立区教育員会子ども家庭部

平成29年3月

《 目 次 》

1	社会教育の基本的な考え方	1
1)	社会教育の歴史	
2)	足立区の社会教育	
3)	第14期社会教育委員会議の設置背景	
2	第14期社会教育委員会議の概要	2
1)	会議設置根拠	
2)	教育大綱に向けて	
3)	第14期社会教育委員会議のテーマ	
4)	検討課題の設定について	
5)	意見交換に伴う検討項目の設定について	
3	委員による意見・提案	6
◇	明石要一委員（千葉敬愛短期大学学長）	6
◇	成田國英委員（日本体育大学名誉教授）	9
◇	松田恵示委員（東京学芸大学副学長）	11
1)	今後の青少年教育、家庭教育支援の在り方	
2)	青少年の団体活動、事業の在り方	
3)	居場所づくり・指導者、リーダー養成の在り方	
4)	新たな事業提案	
4	最後に	15
5	第14期足立区社会教育委員からの提案・イメージ図	16
	【参考資料】	17
	資料1…第14期足立区社会教育委員会議委員	18
	資料2…区長との意見交換会	19
	資料3…用語解説	23
	資料4…会議開催日・主な審議内容等	25

※文中下線…ご不明な場合は各項目の最後、またP22の用語解説をご覧ください。

1 社会教育の基本的な考え方

1) 社会教育の歴史

昭和24年に社会教育法が制定されて、すでに67年の年月が経過しました。この間、経済や科学技術の進歩、国際化など、人々の生活は大きな変化を遂げました。社会教育についても、グローバル化した社会・生活環境と密接な関係をもって発展してきました。

こうした時代に、地域や家庭をさらに活発化させて、将来を担う子どもたちをもっと元気に育てるためには、行政や関係機関、関係団体はどのような対策を講じていくべきか、今こそ社会教育の今日的役割、進むべき方向性について検討していくべきです。

社会教育の定義は、「学校の教育課程を除く、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動」とされています。そのうえで、生活、地域課題に対応できる学習を教育的に高めていくとともに、地域住民が学び合い相互学習を通して絆を深めていくことです。

この実現に向けては、地域住民において多種多様な事業への参加や体験・自主活動を通して学んだ知識、技術などを人づくり、地域づくりに還元していくことが求められています。

行政においては、グローバル化した社会のなかで区民のニーズを的確に捉え、地域住民による主体的な活動に対して効果的、効率的な支援を継続的に行っていく必要があると考えています。

2) 足立区の社会教育

人々は、生涯をとおして健康で生きがいのある暮らしや、家族や友人とともに楽しく人生を過ごすこと、さらには、多種多様な学習や自己実現を目指す機会を求めているのではないのでしょうか。

こうしたなかで足立区の社会教育は、社会参加の促進、サークル育成、生きがいづくりを目的とした区民対象の様々な生涯学習事業、イベントなどを展開してきました。具体的には、地域学習センターなどを中心に、行政による各種文化・スポーツ、健康体力づくり事業やサークル育成、指導者、ボランティア養成など広く実施してきました。

また、青少年の育成団体や教育機関、PTAなどによる主体的な活動のほか、地域団体と行政による協働のもと、青少年の体験活動や居場所づくり、ボランティア活動の普及・推進なども大きな成果を挙げています。

これらの地域コミュニティに關与する団体については、地域と行政をつなぐパイプ役として、生活や家庭、健康、福祉に關すること、さらには、地域や生活課題などの解決に向けて活動していく組織や団体として成長し続けています。

しかし、青少年の育成団体や関連制度については、50年以上の歴史を経て、その環境は前述のとおり大きく変化しています。こうした時代の流れを受け、これまでの社会教育の取り組みや団体の活動における役割など、時代に即した方策が必要になってきました。

今後も、社会教育を取り巻く環境の変化に対応していくためには、足立区の特性を捉えた社会教育として機能のさらなる充実に向けて取り組んでいきたいと考えています。

3) 第14期社会教育委員会議の設置背景

足立区民においても、少子高齢化や生活スタイル、価値観の変化とともに、社会教育に対する区民ニーズは多様化、高度化してきています。

こうしたなか、社会教育を取り巻く環境として、地域のつながりや連帯感、支え合いの意識が徐々に希薄化してきているのも事実です。特に若い世代においては、町会・自治会への加入、地域活動、事業への参加率の減少は、本来、社会教育の軸となる地域コミュニティの機能の低下が大きな課題となっています。また、行政と関係団体との連携・協働事業でも、マンネリ化や参加者が集まらない、指導者が育たない、高齢化によるスタッフ不足など多くの課題を抱えています。

また、喫緊の課題である子どもの貧困や不登校対策、経済、教育格差など、行政課題、生活課題も視野に入れて展開していく必要があります。そのためには、前述の団体との連携・協働体制が不可欠であり、さらに、地域の人材やボランティア、民間活用の導入なども視野に入れて社会教育施策を展開していく必要があります。

そこで、足立区教育委員会では、「教育大綱」の策定や地域、家庭の教育力の向上、体験活動を通じた青少年の育成などに向けた方策について、第14期社会教育委員会議を設置して学識経験者から意見、提案を受けることといたしました。さらには、足立区の青少年育成関係団体などによる主体的な活動、事業実施に向けて、少年育成団体による適正な事業の実施状況などについても意見を聴いていきます。

【用語解説】

グローバル	世界的な規模、社会の大きさや広がりなど
パイプ役	人や組織の間に立って両者の橋渡しをする役割

2 第14期社会教育委員会議の概要

1) 会議設置根拠

足立区の社会教育委員会議は、平成23年6月以降休止していましたが、足立区社会教育委員条例第2条の規定に基づき第14期足立区社会教育委員会議を設置し、社会教育における学識経験者として専門大学、専門機関より3名の委員を委嘱しました。

【期間】

平成26年12月1日から平成28年11月30日 ※2カ年

2) 会議方針及び足立区教育大綱策定に向けて

社会教育委員会議におきましては、足立区の社会教育、生涯学習に関するこれまでの取り組みや成果、課題などについての情報提供を行い、各委員からの意見や実践的提案を今後の事業に活かしていきます。また、当会議については、足立区教育大綱の策定に向けた参考とするため、「区長との意見交換会」を実施しました。

「区長と第14期社会教育委員との意見交換会」

【実施日】…平成27年9月8日（火）※第7回定例会

3) 第14期社会教育委員会議のテーマ

【メインテーマ】

地域の教育力向上、青少年の育成に向けた新たな方策

【サブテーマ】

地域の教育力を高め体験活動を通して青少年を育む

<ちいきを元気に！子どもたちをもっと元気に！！> ※表紙に活用

4) 検討項目の設定について

社会教育委員会議では、前記テーマに基づき、以下4つの項目を中心に検討することとしました。

①～③の項目については、既存の事業の見直しや改善に、④については、新たな取り組みに活かしていきます。

①青少年教育、家庭教育の支援の在り方

②青少年の団体活動、事業の在り方

③居場所づくり・指導者、リーダー養成の在り方

④新たな事業提案

5) 意見交換に伴う検討項目の設定について

①青少年教育、家庭教育の支援の在り方

青少年関連の関係団体の活動をさらに活性化するための制度、活動支援、指導者養成のための制度を構築する。また、足立区教育大綱に関する情報提供、情報共有を図るとともに、教育大綱の策定からこれに基づく関係事業の展開に向けて意見交換していく。



【検討項目】

- ・これまでの社会教育、生涯学習の取り組みの成果と今後の在り方
- ・家庭の教育力を向上させるための方策、具体的取り組み

- ・足立区教育大綱、教育振興計画への活かし方
- ・第2期あだち次世代育成支援行動計画策定のための調査(H21.3)
- ・中高生を対象とした取り組みのための関係部署との連携
- ・家庭教育支援・青年期に対する教育支援再構築の課題
- ・家庭教育学級などの従来型の取り組みの課題整理
- ・青年期に固有な課題の整理
- ・青年期の教育支援のための関係部署との連携について課題の整理
- ・開かれた学校づくり協議会での取り組みの確認と課題検討

②青少年の団体活動、事業の在り方

P T A 活動や青少年対策地区活動などの健全育成活動を、区の社会教育のなかでどのように位置づけていくかについて意見交換していく。また、青少年のための体験活動の推進を、社会教育の観点から地域組織をベースにした取り組みとして再構築するための方策を検討する。



【検討項目】

- ・青少年関係団体の現状と今後の方向性
- ・地域の教育力向上、青少年育成に向けた新たな団体活動
- ・地域の教育力の核となる組織、団体の再構築（青少年委員、P T A、子ども会等）
- ・時代に即した青少年委員制度の見直し
- ・青少年対策地区委員会の組織の在り方と活動支援の在り方
- ・地域における新しい自主的な取り組みと既存の団体組織とのマッチング
- ・中高生の居場所づくり、対象の事業の取り組みの在り方

③居場所づくり・指導者、リーダー養成の在り方

地域における中高生の居場所づくりとして、地域が中高生を育む仕組みづくりや育成に関わる指導者、リーダー養成、また、家庭教育支援を進めていくための人材育成、環境整備についての課題を整理する。



【検討項目】

- ・地域資源を活かした体験活動
- ・生活習慣、子どもの状況などを踏まえた体験活動
- ・担い手である地域、青少年団体を巻き込んでいく体験活動

- ・中高生の育成に関わる指導者、リーダー養成
- ・家庭教育、青少年教育指導者、支援者に求められる資質と育成策、その組織化
- ・中高生、青年期の教育支援者に求められる資質と育成策、その組織化

④新たな事業提案

幼児期から青年期における特性や課題を確認し、成長過程、生活リズム、進学や就職、自己実現、家庭における健康管理等をキーワードに、時代背景に即した事業について検討していく。



【検討項目】

- ・子どもの健康・生活実態調査の分析・検討
- ・アウトリーチ型家庭教育支援の可能性、方法、場の提供、モデル事業
- ・幼児教育の取り組み
- ・親子食堂モデル事業の取り組み
- ・青少年期における家庭教育支援で想定されること
- ・地域における青少年の体験活動の推進と多世代にわたる取り組み
- ・地域団体、大学との連携による体験活動の取り組み
- ・多世代を対象とした体験活動の推進策

【用語解説】

マッチング	種類の違うものを組み合わせること
アウトリーチ	公的機関、公共施設などが行う地域への出張サービス、訪問支援

3 委員による意見・提案

◇明石要一委員（千葉敬愛短期大学学長）

【意見】

1) 青少年教育、家庭教育支援の在り方

- ・つまずきがあった場合、どの時点のつまずきか把握する必要があります。保護者が変わるきっかけは、子どもが変わったことを数字で示すことや、エビデンスをどう残すかが大切です。例えば、達成した地域、劣っている地域、標準的な地域の動向などを調査することです。
- ・体力向上の取り組みと給食を残さない、けがの率と風邪をひかないなど、測定による間接的な効用が見えてきます。また、基礎体力がないと学習に集中できません。
- ・1年間で子どもは大きく成長します。子どもの健康・生活実態調査は節目のデータがあるとクロス集計や広範囲の分析、調査も可能になると思います。
- ・開かれた学校づくり協議会は学童期、青少年課では0歳から5歳までをどうするか、その接続も含めた視点が必要と考えます。家庭教育の問題も0歳から5歳までがとても大切です。保育所と幼稚園の連携も必要です。授業参観も2割は関心がないのが実情なので、ほかの施策を絡めていく視点が必要となります。

2) 青少年の団体活動、事業の在り方

- ・貧困対策は、中高校生以上の居場所づくり事業を絡めて検討するべきです。また、コミュニティスクール（教委）、放課後子どもプラン（厚労省・文科省）、地域（生涯学習部局）の三つを合わせた体験事業を検討していく必要があると考えます。
- ・今の幼児、小学生の体幹は弱いといわれています。体幹遊びで柔軟な体をつくっていくことが必要です。子どもの健康づくりの狙いは、けがをしないための運動を実践していくことで、それは幼児期から行うことです。頭から転ぶ幼児が非常に増えています。
- ・放課後の活動で、生活のリズムをつくってあげるのがイギリスの教育。チームをつくりパソコンやゲームで算数に力点を置く教育がアメリカ。幼児講座もインターネットです。韓国の放課後では、登録制でお稽古や塾を学校が用意しています。外国の取組みは参考になります。
- ・事業の取組みにおいては、放課後にどのように展開するかが課題です。日本の教育は、同じ質を提供する一方で、放課後や土曜の過ごし方に差が出る傾向です。
- ・一番の課題は、支援が必要な人が事業に参加しない傾向にあることです。特に課題を抱えている児童、生徒においては、小・中学校のどこでつまずいたか、幼児期、小学校の学習状況を把握して対応していくことが大切です。

3) 居場所づくり及び教員、専門職、指導者・リーダーの在り方

- ・学校と社会教育をつなぐ地域学校協働本部が必要です。中教審の課題は、全体をまとめる統括コーディネーターの育成です。また、チーム学校に、スクールソーシャルワーカー、看護師や部活の指導者、一般企業に依頼する考えもあると思います。今後は、学校を起点とする地域連

携担当教職員が必要と考えます。

- ・今後の社会教育行政の課題としては、専門性を持った社教主事や特に資格が無くてもコーディネーター、ファシリテーターをいかに育成していくか。また、生涯学習事業に参加した方の学習成果をどのように地域に還元するかについて中教審の審議テーマとなっています。
- ・6年生までに子ども会に入り、中学生でジュニアリーダーになること。これはプラスの連鎖です。あるステージが終わったら次のステージという成長スタイル、社会貢献スタイルを提示してあげることが大切です。中教審では、コーディネーターが一番うまくいくのはPTAの役員経験者であり、全体がわかっていること。これもプラスの連鎖です。

4) 新たな事業提案

①青少年期における家庭教育支援策

- ・親の3割は相談相手がいません。子育ての悩みの解決はどこ機関が行うか、エージェントで解決できるのか、孤立した親たちをネットワークできるかについて検討していくことが必要と考えます。
- ・放課後の遊び方の問題と軽度の発達障がい、いじめと不登校など、困難を抱えた子どもたちの保護者へのサポートが課題です。運動会は、保護者が集まるので家庭教育ができるチャンスです。

②アウトリーチ型の家庭教育支援策

- ・自力で一本立ちさせる施策も必要です。引きこもりを復帰させる対策で、合宿、宿泊、食事で人間関係をつくってはいかがでしょうか。
- ・親子関係、家庭教育、学校教育は縦の関係です。親と子、教師と生徒も縦の関係。横の関係はクラスメートです。子どもたちは、斜めの関係があることを知りません。昔は親族や親戚が教えました。家庭教育は縦関係を支援しますが、支援者の確保を斜めの関係でいうと、学生は個別訪問ができます。疑似の親戚をつくるような関係です。

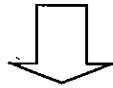
③新しいアウトリーチ型の家庭教育支援策モデル事業（案）

- ・食堂事業は、相談相手や軽度の発達障がい、相談の質に焦点をあてることにより分析できます。
- ・子ども食堂を考える場合の三つのポイントとして、1点目は、食堂で賄いをつくる人です。元栄養士を再雇用の場合としてボランティア的にお願ひできないか。2点目は、定年で引退しても技術は持っている人の協力です。3点目は、どのように場所を確保するかです。そのためには、福祉コンビニというメッセージを出していくといいと思います。その時に企業協賛、行政サポートが必要です。

【提案】

- ・幼児期のホームステイ、小学生夏休み宿泊体験、全中学生短期全寮制、高校生ボランティア体験など（生活力向上を目的とする）
- ・体験活動の普及、充実を目指し（仮称）「足立区青少年体験推進条例」の制定

- ・学力向上や学習・生活・自然体験のサポートに退職校長、教員の活用
- ・朝読書のすすめ。絵本の楽しさの発見（保育所、幼稚園、小学校低学年）
- ・絵本の読み聞かせ。10分読み聞かせ、親子読書習慣（2・3歳児から）
- ・絵本専門士、スーパーバイザーの養成
- ・自転車事故ゼロ運動（自転車乗り方、マナー教育幼児期からの取り組み）
- ・家庭でできること、区ホームページへの掲載（しつけやマナー、親の手伝いなど）
- ・先生から保護者へ連絡帳を通した啓発活動
- ・先生、栄養士による保育所での親子食体験（親子で料理）
 - ※保育所、幼稚園を活用した地域の食卓から家庭へのアプローチ
- ・東京未来大学の保育実習の活用（家庭個別訪問実習／家庭教育アドバイザーの育成）
- ・斜めの関係づくり「1日孫の日」の設置
 - ※孫と祖父母、親戚や近所のおじさん、おばさんなど斜めの関係づくり（手紙で近況報告）



【総括コメント】

- ◆社会教育、生涯学習の視点から学校支援を行うことにより、子どもたちは学校や地域から学んだことを還元できる人間として成長する。キーワードは、「チーム学校」で、「あだち」を元気にしていくことである。
- ◆行政、地域連携のもと、家庭教育を推進していくことにより足立区への愛着心が醸成される。社会教育の原点は、「足立区が好き」、「良くしていきたい」という心情が社会教育行政を発展させる。また、青少年育成の重要ポイントは、「第三の大人」（親や先生以外）との出会いである。

【用語解説】

エビデンス	有効と考えられる証拠や根拠、検証結果など
クロス集計	複数の情報やデータについて分析し集計すること
コミュニティスクール	保護者や地域が学校運営に協力し一緒に学校づくりを進める仕組み
コーディネーター	色々な仕事や作業などを調整していく人
ソーシャルワーカー	社会福祉を学び社会的に困っている人の相談に乗り援助を行う職種
ファシリテーター	会議や作業など集団活動を中心となってスムーズに進めていく人
ジュニアリーダー	子供会や地域活動などの運営協力を行う中学生や高校生
エージェント	代理人や代理業者、仲介業者など
ネットワーク	人や組織を広く組み合わせる、広くつなぐなどの意味
スーパーバイザー	監督、管理、監視などを行う人

◇成田國英委員（日本体育大学名誉教授）

【意見】

1) 青少年教育、家庭教育支援の在り方

- ・区民には、家庭教育、非行対策の必要性を理解させることがとても重要です。青少年施策に向けては、国や東京都のデータと区の実情を示すことが必要です。
- ・現在、学校教育では、地域の方々が教育活動に参画していく「地域に開かれた活動」が求められています。学習指導要領の改訂は、チーム学校の在り方検討がテーマになっています。チーム学校は、これからの足立区教育の進展に大きく関わってくると考えています。
- ・教育課程は、地域の人的・物的資源を活用し、放課後、土曜日を活用した社会教育と連携していくべきです。学校教育を学校内に閉ざすことなく、目指すところを社会教育と共有、連携しながら実現させていくことが求められています。学校は、社会に開かれた教育課程の実現に向かっていくべきです。

2) 青少年の団体活動、事業の在り方

- ・若者対策は、グローバル時代を見据えて、文化やスポーツ活動など積極的に体験できる環境づくりが必要です。さらに、足立区の良いところに向けて教育、子どもたちが夢を持って、良いところをさらに伸ばす教育をすすめていくことが大切であると考えています。
- ・そのためには、学校、保護者、地域や青少年の育成団体、そして子どもたちなどが、点と点の関係性ではなく、どのように結びついているのか、結びつけていくのかをしっかりとイメージしながら事業を展開していくべきです。
- ・青少年の団体活動において、交流機会は大変重要です。グローバル化時代を迎えて、あだちの子どもたちは、足立区をどのように見て、どこに向かって成長していくのか、また、学校や地域でどのように育てていくのか。その答えの一つが団体交流、地域交流を通して生まれます。
- ・事業を計画するうえで、社会教育施設や学校、区内の大学、民間施設など、活用できる施設の特色を活かすことが大切です。これに合わせて、地域の人材をどのように絡めていくかが子どもたちを呼び込み盛り上げていくヒントであります。こうした取り組みがかみ合うことで、地域も活性化していきます。

3) 居場所づくり及び教員、専門職、指導者・リーダーの在り方

- ・学校と地域の連携を推進していくため、学校内において地域との連携、推進の中核を担う教職員を地域連携担当教職員（仮称）、として法令上明確化していくことが必要です。
- ・「チーム学校」の考え方のもと、保護者や地域の力を学校運営に活かしていくこと、学校が地域づくりの中核を担う意識を持って、学校教育と社会教育との連携・協働をより円滑に行うための資質向上が、これからの教員養成に強く求められています。
- ・小学校の帰りの会などで、「先生はこの本を読んでいる、お父さんお母さんも読んでいるかな」という話をしてほしいです。まず先生が本を読むお手本を子どもの前で示すことです。
- ・保護者の気持ちを考えますと、学校の教師に対しては、授業のほかいろいろとお世話になっている気持ちがあります。一方、未就学児の保護者の場合は、学校と違いどのように先生に対応

していいのかわからない保護者が多いと考えています。新卒の教員は、足立区のこれからの教育を支えていく強い信念を持つべきです。

4) 新たな事業提案

① 青少年期における家庭教育支援策

・教員は子どもたちの情報を持っています。この情報を家庭の教育力向上に活かすことができるはずですが、また、家庭訪問に行かなくても、保護者同士の話し合いや情報交換により、課題を解決していくことも可能と考えています。しかし、残念ながら、こうした動向は少ない状況にあります。

② アウトリーチ型の家庭教育支援策

・アウトリーチについては、子育てに課題がある家庭に参加してもらい、勉強や生活面で意欲を持たせていくことが課題です。

【提案】

- ・貧困対策のひとつとして学校をプラットフォーム化していくこと
- ・家庭の課題解決に向けた親の居場所づくり、家庭間を結ぶ親のサロン
- ・「こんな本を読んでいる。こんな考え方が生まれる」、という子どもの前で語る雰囲気、足立区全体として盛り上げていく。



【総括コメント】

- ◆子どもたちに向けた社会教育とは、グローバル社会で活躍していくための国際感覚や自ら考え解決に向けて行動できる力を身につけていくことである。この認識に立ち、個人の成長に合わせた具体的な目標を定めていくことが重要である。
- ◆誰もが子どもを支える主役である。これからは生き、将来の社会の担い手となることを、区民は強く認識することが社会教育の第一歩である。

【用語解説】

プラットフォーム	ここでいうプラットフォームは多くの人が集う、窓口機能をもつこと
----------	---------------------------------

◇松田恵示委員（東京学芸大学副学長）

【意見】

1) 青少年教育、家庭教育支援の在り方

- ・問題を抱える家庭には、家庭教育に自信を持たせることや、サードプレイス（第三の居場所…家庭や職場のほかに居心地が良い場）が必要です。また、身近な人より、やや遠い存在の人と関係性を持つことがポイントと考えています。
- ・中高生の不登校、中途退学は、教育、福祉面からも問題が出てきています。高校中退者が家庭にかかることについて課題といわれていますが、具体的な施策を行っている自治体はほとんど見られません。
- ・家庭や子どもたちの孤立化に対するフォロー、支援の方策は、3～5年スパンのスケジュールリング、ロードマップなど、見取り図が必要と考えます。
- ・SNSに対する信頼感は、行政や教育者、大学などが担っていくべき今後の新しい課題です。家庭教育の必要性は、子どもより親の支援がポイントと思います。親子一緒に集うことで、地域の関係性が広がっていきます。また、子どもが事業に参加することで、親に時間の余裕ができるので、母親同士のコミュニティも生まれるチャンスも増えていきます。

2) 青少年の団体活動、事業の在り方

- ・家庭教育支援ネットワークには、既存の社会教育施設をハブとして活かすことが課題です。体験プログラムは、子どもに対する直接支援です。家庭教育の場合、親が子どもにどうなってほしいか、習い事させるかについては、教育主体が親になるので、その親を支援していくのが一番狭い意味での家庭教育支援となります。
- ・青少年、家庭教育支援事業の一つには講座の提供があります。また、一つはサロンのような集える場の整備。そして、訪問型のアウトリーチです。現在、機会提供、場の構成に力点を置いています。そこに来ない家庭や子どもたちの問題が大きいと考えています。近年、訪問型事業の難しさがクローズアップされています。
- ・事業展開において、青少年委員や大学生の活用は、非常に重要と考えています。また、人材育成においては、単にボランティア講座ではなく、実効性のある育てる仕掛けとして、認証制度のようなシステムを絡ませていくことが必要と思います。
- ・近年の家庭は、身内意識が強くなり過ぎて、地域や第三の大人との関係性が薄れてきていることが懸念されています。今後の青少年、家庭教育支援事業には、社会的おじさん・おばさんを参画させていくことが必要であり、それによって参加機会も広がると考えます。

3) 居場所づくり及び教員、専門職、指導者・リーダーの在り方

- ・家庭教育支援の力点は、就学前と小・中学校期、それ以降の子どもの発達段階で変わっていきます。そのため、区分けして考えていく必要があります。例えば、リアルとハイブリッドな面を持たせ、大学生がメンターとなることで、より身近で深い仕組みとしてつくられると考えています。家庭教育において大学生の活用は重要です。
- ・高校中退者に対する家庭教育の重きが広がって、教育のみならず、福祉でもエアポケットにな

っています。家庭への訪問型で対応していくのは、一つの課題です。また、ソーシャルワーカーやカウンセラーなど、多面的な子ども支援の専門性を持った人がチームになることで、活動の中でほかのメンバーも育っていくことも考えられます。訪問型のチームをどう地域ごとに編成するか、具体的な課題になっています。

4) 新たな事業提案

①青少年期における家庭教育支援策

- ・他の家庭を知ることは、コミュニケーション能力を高めてしつけもできる機会です。現在、機会提供に力点が置かれ、参加しない家庭の問題が大きいと考えます。また、訪問型支援については、一人一人の子育ての補強ではなく、孤立している子育て環境をつなげていくことが重要と考えています。
- ・「早寝早起き朝ごはん」は学校で学ぶことではありません。親にとって家庭教育のポイントは、子どもと一緒に目標を立てることです。習い事も、親の選択が大きいですが、子どもの目標と一緒に考えてあげることが大切です。
- ・行政側からの働きかけで事業に参加することと、少しでも外へ出ようとする意識があって、二つが表裏の関係で生育されることが大事であると考えます。
- ・情報共有、意思疎通する仕組みをどのようにつくるかで網の目が細かくなります。行政は、骨の部分のかかわりなので、以降の肉とか網の目を細かくしていく部分は、地域住民が主体的に動く必要があります。
- ・家庭教育支援を考えた場合、家庭教育の主体者をどうつくっていくか、主体者になりきれない人たちの家庭に、今訪問しないとイケない非常に重篤な状況ともいえます。重篤な状態にある家庭には、行政が前へ出る必要があると考えます。
- ・親に自然になれる思い込みがあるような気がします。古い時代も親教育について社会の中に存在していました。その部分を促していかないといけない時代です。
- ・親も斜めの関係があり、子育ての相談ができることも重要です。「社会的おじ・おば制度」は、SNSを使って振り分ける仕組みができればどうでしょうか。

②アウトリーチ型の家庭教育支援策

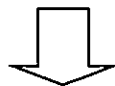
- ・アウトリーチの問題は、出てこない家庭への働きかけです。例えば、一つの手がかりとして、子どもの健診を活用して家庭教育支援に入る。その中で支えが必要な家庭への仕掛けをしていくのはいかがでしょうか。
- ・学習機会に來ない層には訪問型事業が一般的です。一方、家庭教育として、生活習慣を身につけることと習い事があります。家庭ごとの教育目標は、一緒と違う部分があるので、学校と家庭にどうアプローチしていくかが課題です。
- ・家庭が厳しい状況にある子どもたちは、生活習慣、習い事の両面に働きかけがない場合が多いです。足りない部分を地域でどのように支え教えることができるか検討すべきです。

③新しいアウトリーチ型の家庭教育支援策モデル事業（案）

- ・つながりは一つのキーワードです。家庭が寄り集う意味で子ども食堂は広がっています。六木小、十三中エリアは、学力、学校生活など個別性を出して、家庭教育からの生活支援として明確なモデルができています。
- ・訪問型の成功例では、訪問型チームをつくる前にNPO活動が地域側で、ゼロ歳児健診での把握を行政が外部委託するなど、民間団体と活動している個別なリソースがあります。
- ・遊食とは遊びと夕食と掛けたプロジェクト。地域的につながりが生まれにくいところでは、食に関する交流によって、子どもたち、地域の人たちがそれを食し合うという場です。
- ・子ども食堂の食が持つ力は大きいと思います。社会教育ラインから取り組むことは大きな可能性があります。地域の側で、少しの場と行政側の後押しで動いていくことも一つの方法です。

【提案】

- ・経済状況、所得基準に応じて、子ども会などの経費を負担していく仕組みづくり
- ・子どもに働きかけるプレーヤーと家庭をつなぐコーディネーターでプラットフォームをつくる。
- ・親、先生以外のチャンネルを増やす方策、近所の交流「おじ・おば制度」（中学生対象）
- ・大学生の人材育成
- ・講座だけではない実効性のある認証制度
- ・ターゲット型とユニバーサル型の家庭教育支援
- ・中学生期、高校生期から親になる前の教育システム
- ・これからの社会教育、家庭教育の主体者として子どもを成長させる仕組みづくり



【総括コメント】

- ◆足立区は、幼児期から成人期という世代を超えて流入し交じり合い、様々な教育が生まれていくとともに循環している場面が非常に多い。世代間をつなぐ循環型の交流、伝達関係が足立区の社会教育の今後の強みとなり、足立区教育大綱の進展に必ず活かされていく。
- ◆家庭教育支援の主体者は保護者であり、保護者をどう支援していくかが課題である。問題を抱える家庭には、家庭の教育に自信を持たせること。サードプレイスが必要である。

【用語解説】

サードプレイス	自宅や学校、職場と違う心地のよい第3の居場所
スパン	時間的な間隔や期間
ロードマップ	計画的に事業などを進めていくための表や一覧
SNS (IⅨ・IⅨ・IⅨ)	メッセージなどを通じて交流を目的としたサービスの総称
ハブ	軸や中心となるものから放射線状に出て機能していくこと
リアル	現実に即していること
ハイブリッド	違うものを組み合わせ複合的に効率よく働かせること
メンター	仕事上の指導者、助言者
エアポケット	空白の部分。そこにだけあるべきものがない状態に陥ること
カウンセラー	悩みや問題を持つ人に面接して相談相手になる人。助言者、相談員。
キーワード	問題の解明や内容を理解するうえで、重要な手掛かりとなること
リソース	目的を達成するために必要なこと、役立つこと
プレーヤー	選手や競技を行う人、また、複数の仕事や役割をこなせる人など
ターゲット	標的や的、必要性、重要性があること
ユニバーサル	一般的、普遍的、普通のこと

4 最後に

足立区の子どもたちには、世界の産業や貿易、歴史や学問、スポーツなど世界の出来事に興味を持ってもらいたい。グローバルに世界を見渡したとき、日本、東京都の位置、そして足立区の良さや改善すべきこと、反省点がきっと見えてくるはずです。

社会に目を向けることで、大人になってからも地域を知り、関わり、そして一時代を築いていく力を身につけるきっかけとなるのではないのでしょうか。こうして育った子どもたちが成長し、地域の一員として行政とともに一緒に考え連携、協力していくことが、将来の社会教育、家庭教育のしくみづくりが可能になっていくと思います。

足立区は、世代を超えた交流が多く生まれる地域性があり、これと相まって様々な教育場面が積極的に展開していて、循環できる環境にあります。世代間をつなぐ交流、伝達が足立区の社会教育の強みであり、足立区教育大綱の進展に必ず活かされていくことを強く感じました。

また、子どもの居場所づくりも大切ですが、親に向けた教育も必要です。親の居場所づくりとともに、そこから派生していく交流の場が最も大事な取り組みではないのでしょうか。家族の出会い、地域と家庭を結ぶ交流サロン、こうした取り組みが原動力となり、地域のコミュニティに大きく発展していきます。これに向けた家庭教育の仕掛けづくりに期待しています。

社会教育、家庭教育は、決して難しいものではありません。地域のことをよく知る地域が主体となって、行政が支え支援していく、こうしたパートナーシップで進めていくことがとても重要であると思います。

一方、足立区は、コミュニティスクールの発祥の地です。文部科学省では、初等中等教育局がコミュニティスクール、生涯学習政策局が学校支援地域本部を所管しています。現在、この2つの局が一緒になって「チーム学校」について意見交換をしています。

今後は、教育委員会をはじめ福祉、保健医療、子育てなどの窓口の一本化、そこに行けばすべて分かるワンストップ行政と24時間子育てに対応できるネットサービスとしての新しい仲間づくり、家庭教育の第三の空間ともいべきオンラインシステムの時代です。共通の話題を持った仲間同士の空間を共有してディスカッションもできる。お母さん方の子育てネットを足立区から発信する「あだち子育てホーム」と名づけて、このシステムを開発して広げていくのはいかがでしょうか。

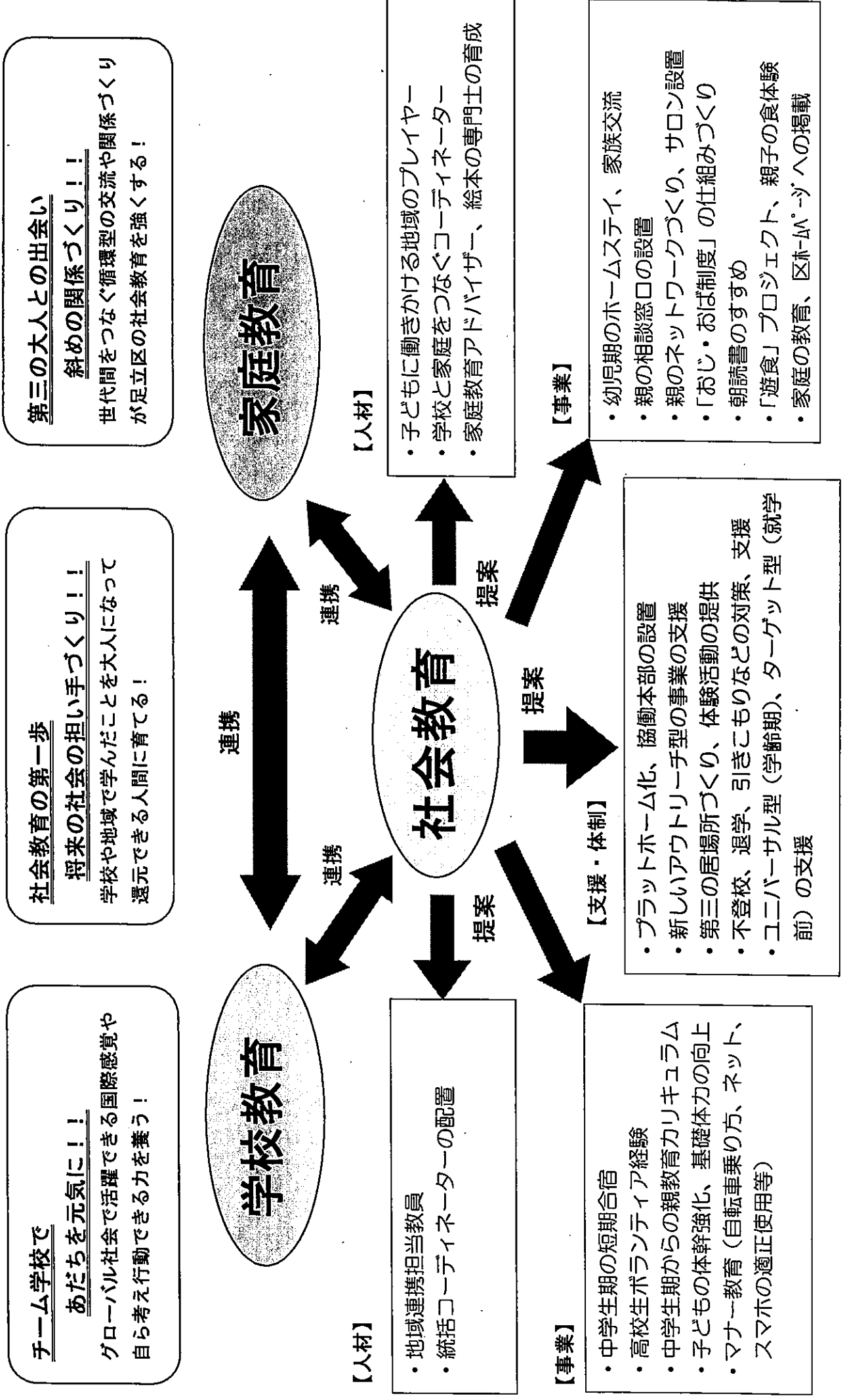
今後は、地域の社会教育関係団体が一緒になって意見交換していく場、そんな地域のコミュニティがあって、はじめて自分たちが自ら地域のことを考えたり、困っている人に声をかけたり、さらには、地域の想いを足立区に提言することに展開できます。

以上、様々な視点で議論してまいりましたが、こうした関係機関、団体とさらなる連携、協働により、子どもたちが学校や地域、家庭で学んだことを大人になって様々な場所で還元できる大人に成長していく循環が大事です。大人も子どもも足立区に愛着を持ち続け、地域をもっと良くしていく心を育てることこそ社会教育、家庭教育であり、教育の原点であります。これからの足立区の発展に大いに期待しています。二年間にわたり、誠にありがとうございました。

【用語解説】

オンラインシステム	通信回線、コンピュータなど即座に処理するためにつなげていく方法
ディスカッション	自由に意見交換して結論を導くこと

テーマ：地域の教育力向上、青少年の育成に向けた新たな方策



チーム学校で

あだちを元気に!!

グローバル社会で活躍できる国際感覚や自ら考え行動できる力を養う!

社会教育の第一歩

将来の社会の担い手づくり!!

学校や地域で学んだことを大人になって還元できる人間に育てる!

第三の大人との出会い

斜めの関係づくり!!

世代間をつなぐ循環型の交流や関係づくりが足立区の社会教育を強くする!

学校教育

【人材】

- ・地域連携担当教員
- ・統括コーディネーターの配置

【事業】

- ・中学生期の短期合宿
- ・高校生ボランティア経験
- ・中学生期からの親教育カリキュラム
- ・子どもの体幹強化、基礎体力の向上
- ・マナー教育（自転車乗り方、ネット、スマホの適正使用等）

家庭教育

【人材】

- ・子どもに働きかける地域のプレイヤー
- ・学校と家庭をつなぐコーディネーター
- ・家庭教育アドバイザー、絵本の専門士の育成

【事業】

- ・幼児期のホームステイ、家族交流
- ・親の相談窓口の設置
- ・親のネットワークづくり、サロン設置
- ・「おじ・おば制度」の仕組みづくり
- ・朝読書のすすめ
- ・「遊食」プロジェクト、親子の食体験
- ・家庭の教育、区ホームページへの掲載

社会教育

【支援・体制】

- ・プラットホーム化、協働本部の設置
- ・新しいアウトリーチ型の事業の支援
- ・第三の居場所づくり、体験活動の提供
- ・不登校、退学、引きこもりなどの対策、支援
- ・ユニバーサル型（学齢期）、ターゲット型（就学前）の支援

第14期足立区社会教育委員会議

【参考資料】

- 1 第14期足立区社会教育委員会委員
- 2 区長との意見交換会（概要）
- 3 用語解説
- 4 会議開催日・主な審議内容

1 第14期足立区社会教育委員会議委員

1) 委嘱期間

平成26年12月1日から平成28年11月30日まで

2) 委嘱委員（学識経験者）

氏名	職名	経歴等	
明石 夔一	千葉敬愛 短期大学学長	<ul style="list-style-type: none"> ・教育社会学（青少年教育） ・現文部科学省中央教育審議会委員 ・独立行政法人 国立青少年教育振興機構理事（青少年教育研究センター長） <p>千葉大学教授を退官後、現職。文部科学省中央教育審議会委員の他、国や自治体の審議委員を歴任している。</p>	議長
巖田 國英	全国子ども会 連合会理事	<ul style="list-style-type: none"> ・教育学（教職教育） ・日本体育大学名誉教授 ・元文部省初等中等教育局教科調査官 ・元日本体育大学副学長 <p>文部省教科調査官在任中、文部省として初めて小学校での生徒指導の手引を発行した際に担当。文部省退官後、東京家政学院大学教授、日本体育大学教授を務めた。</p>	副議長
松田 恵示	東京学芸大学 副学長	<ul style="list-style-type: none"> ・社会学（スポーツ・教育・文化） ・現NPO法人東京学芸大学子ども未来研究所理事長 <p>放課後子ども教室開始時、文部科学省の担当官も兼務するなど子ども施策に深く関わり、中央教育審議会小委員会委員も務めた。</p>	

2 区長との意見交換会（概要）

日 時	平成 27 年 9 月 8 日（火）午前 11 時～11 時 55 分 会場；第二副区長室
委員 出席者	明石要一委員（千葉敬愛短期大学学長）・成田國英委員（日本体育大学名誉教授） 松田恵示委員（東京学芸大学教授）
区側 出席者	近藤区長・定野教育長・山本教育委員会次長・宮本学校教育部長 伊藤子ども家庭部長・秋生子どもの貧困対策担当部長 中村政策経営課長・杉岡教育政策課長・森学力定着推進担当課長 飯塚幼児プロジェクト推進担当課長・鳥山総務課長・浅見地域文化課長 寺島青少年課長・村上青少年教育担当係長・福井青少年教育担当主査

1) テーマ

地域の教育力向上、青少年育成に向けた新たな方策

◆社会教育委員会議では、地域における体験活動及び家庭教育支援のための推進策を中心に討議している。社会教育委員会議における討議内容、検討結果については、教育大綱の策定に向けた参考としていく。意見交換会では、各委員より、今までの討議について報告、意見などいただき区長の考えを示す。

2) 意見交換の視点

※意見・提案のキーワード ※第 6 回までの会議を経て

- ① 地域の力の活用
- ② 地域の第三の大人（地域の大人たち）の活かし方
- ③ 第三の大人・家庭の接し方、親と子どもの力
- ④ 子どもの社会力、生活力向上に向けたサポート
- ⑤ 家庭の教育力向上の支援と子育て支援の在り方

3) 解決策に向けたキーワード

【背景】

- ・データ比較による実態把握（教育力・貧困対策等）
- ・孤立化傾向にある親の子育て
- ・グローバル社会における家庭の教育

【支援・交流】

- ・人、地域、施設をつなぐ訪問型支援
- ・親の居場所、サードプレイス（第三の居場所）
- ・家庭のオープン化、家族の交流を目的とした家庭訪問
- ・親に自信を持たせること、肯定的応援の重要性

【事業・取組み】

- ・アウトリーチ型「届ける事業」の提供
- ・中・高校生に対するアプローチ（都と区のデータ比較から）
- ・ソーシャルワーカーの確保、大学生の活用

【制度】

- ・家庭教育支援のネットワーク化、施設のハブ化
- ・子どもの貧困対策、学校のプラットフォーム化
- ・家庭教育施策、方向性の確立の必要性

4) 意見交換

◆近藤区長

- ・教育大綱に限らず、教育全般についてご意見を伺いたい。
18歳からの選挙については、小・中学からの教育的配慮が必要。また、オリ・パラでも、教育面におけるレガシーについて方向性を示していく必要がある。

◇明石委員

- ・足立区の花はチューリップと伺った。オリ・パラでは、オランダの招致活動を進めてほしい。また、新生児の誕生には、球根をプレゼントするなど、地域でお祝いする気運を高めてはどうか。地域貢献やまちづくりにつながる。
- ・千葉市の「子ども議会」は評判が良い。小学生から政治に興味を持たせ、18歳からの選挙権では、一番に投票する運動を進めてはどうか。投票箱の確認は励みになる。

◇松田委員

- ・中学生期の交友関係は長く続いていく。地域のネットワークから離れたグループが問題を起こす傾向にあり、高校で影響がでてくる。中学生には、学校と違う価値観を持つ地域からのアプローチが必要である。
- ・貧困対策の働きかけとしては、社会的役割を与えポジティブな連鎖を進めていくことが大事である。中学生には、教職の免許状をとる大学生のインターンを活用するシステムを提案したい。

◆山本次長

- ・問題を起こしたグループとは、成人になってもフェイスブックでつながっている。そこでは、仲間意識とともに自制心も養われている。

◇明石委員

- ・足立区を自慢できる子どもたちに育てたい。そのためには、四季ごとに区を自慢できる絵や写真などを子どもたちから募集し、職員の名刺に活用して区をPRしてはどうか。
また、給食メニューを家庭や高齢者の朝食に活かす食の改善とともに、幼児期からの体力づくりを提案する。

◇成田委員

- ・家庭教育では、食後の食器を片付けるなど、幼児期から基本的な生活習慣を身につけさせる感性や情緒を育てることが大事である。

◆近藤区長

- ・子どもたちのスポーツ、体力面についてはどのように考えているか。体力づくりは、小学校からでは遅い。また、貧困対策は、子どもたちが自発的に生きる力を養うこと。発達段階における具体的方策を伺う。

◇成田委員

- ・親は、基礎的な子どもの体力よりも塾や勉強が先の傾向であるが、幼児期、小・中学生期の体力づくりは重要な課題である。

◇明石委員

- ・勉強が苦手な高校生は、基礎体力が無い傾向にある。幼児期から遊びを通じた体幹運動を提案する。また、幼児期から「食、体力、健康」の3本柱を取り入れないと、負の連鎖は断ち切れない。是非とも教育大綱に取り入れてもらいたい。
- ・地域貢献しているカッコいいお兄さん、お姉さん、地域で活躍している人などを目指す子に育ててもらいたい。

◇松田委員

- ・つながり支援策として、子どもたちに役割や責任を持たせて出合いを用意する。高校は中学、中学は小学のように、下の学校段階を対象にボランティアを体験させるプログラムを提案する。
- ・学校は、ソーシャルワーカー、カウンセラーなどチームアプローチを受け入れる必要がある。

◆定野教育長

- ・貧困の連鎖を断ち切ることよりも、プラスの連鎖をつくるのがキーワードとなる。

◇明石委員

- ・地域を元気にする「地域社会学校」の考えが大事である。貧困は、体験不足が原因の一つとして考えられるので、「体験推進条例」を進めてもらいたい。具体的には、一週間以上の体験や合宿、短期全寮制、ホームステイなど発達に応じた体験カリキュラムを考えていきたい。
- ・幼児期は遊ぶ、動植物を育てる。小学生はキャンプと遊び。中学生は地域に参加、ボランティア体験、家の手伝いが大切である。体験のゴールデンエイジを足立区でつくってはどうか。

◇松田委員

- ・運動、自然、教養、ボランティア体験を、一定期間連続して体験した子どもたちに対し顕彰する制度を文科省と広げようとしている。体験は、子ども自らプログラムを主体的につくること、広げていくことが重要である。

◆近藤区長

- ・子どもたちが将来何になりたいのか。夢を実現させるキャリアデザインが必要。孤立した閉そく感のある家庭で育つ子どもは、具体的にイメージできない傾向にある。人生の関係性と体験をどうマッチさせていくべきか。

◆秋生部長

- ・学歴、年代に応じた職場体験として、どの程度のものがキャリアアップにつながるのか。

◇明石委員

- ・大学の学部については、資格を取得する上で必要な情報であるが、学部名まで知らない家庭が多い。中学生には職場体験とともに、先輩から仕事の話なども聞かせるべきである。体験期間は、一週間程度必要である。楽しみや苦しみなど、体験によって自信を高めていくことが大事である。

◇松田委員

- ・ネット環境を活用した職業紹介ができないか。体験の質もある。職場体験とは就労体験であり、その本質部分を味わわなければいけない。そのためのガイドラインを設ける必要があるのではないか。

以上

【用語解説】

レガシー	過去の遺産。後世に残していくこと
フェイスブック	友人や同僚と交流を深めることができるネットワークサービス
ゴールデンエイジ	人間の能力が著しく成長する時期、その指標のようなもの
キャリアデザイン	自分の人生や将来像を自らが主体となって思い描き、実現していくこと
キャリアアップ	高い資格・能力を身につけ経歴を高めていくこと

3 用語解説

用語	解説
グローバル	世界的な規模、社会の大きさや広がりなど
パイプ役	人や組織の間に立って両者の橋渡しをする役割
マッチング	種類の違うものを組み合わせること
アウトリーチ	公的機関、公共施設などが行う地域への出張サービス、訪問支援
エビデンス	有効と考えられる証拠や根拠、検証結果など
クロス集計	複数の情報やデータについて分析し集計すること
コミュニティスクール	保護者や地域が学校運営に協力し一緒に学校づくりを進める仕組み
コーディネーター	色々な仕事や作業などを調整していく人
ソーシャルワーカー	社会福祉を学び社会的に困っている人の相談に乗り援助を行う職種
ファシリテーター	会議や作業など集団活動を中心となってスムーズに進めていく人
ジュニアリーダー	子供会や地域活動などの運営協力を行う中学生や高校生
エージェント	代理人や代理業者、仲介業者など
ネットワーク	人や組織を広く組み合わせる、広くつなぐなどの意味
スーパーバイザー	監督、管理、監視などを行う人
プラットフォーム	ここでいうプラットフォームは多くの人が集う、窓口機能をもつこと
サードプレイス	自宅や学校、職場と違う心地のよい第3の居場所
スパン	時間的な間隔や期間
ロードマップ	計画的に事業などを進めていくための表や一覧

用語	解説
SNS (IⅨ・IⅨ・IⅨ)	メッセージなどを通じて交流を目的としたサービスの総称
ハブ	軸や中心となるものから放射線状に出て機能していくこと
リアル	現実に即していること
ハイブリッド	違うものを組み合わせ複合的に効率よく働かせること
メンター	仕事上の指導者、助言者
エアポケット	空白の部分。そこにだけあるべきものがない状態に陥ること
カウンセラー	悩みや問題を持つ人に面接して相談相手になる人。助言者、相談員
キーワード	問題の解明や内容を理解するうえで、重要な手掛かりとなること
プレーヤー	選手や競技を行う人、また、複数の仕事や役割をこなせる人など
ターゲット	標的や的、必要性、重要性があること
ユニバーサル	一般的、普遍的、普通のこと
オンラインシステム	通信回線、コンピュータなど即座に処理するためにつなげていく方法
ディスカッション	自由に意見交換して結論を導くこと
レガシー	過去の遺産。後世に残していくこと
フェイスブック	友人や同僚と交流を深めることができるネットワークサービス
ゴールデンエイジ	人間の能力が著しく成長する時期、その指標のようなもの
キャリアデザイン	自分の人生や将来像を自らが主体となって思い描き、実現していくこと
キャリアアップ	高い資格・能力を身につけ経歴を高めていくこと

4 会議開催日・主な審議内容等

開催日	審議内容・資料
<p>【第1回】 平成27年 1月7日(水)</p>	<p>○委嘱、平成26年度社会教育関係団体への補助金の諮問</p> <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第14期足立区社会教育委員名簿 ・社会教育委員関係法令(社会教育法、足立区社会教育委員条例、社会教育委員会会議規則、社会教育委員会会議公開規程) ・足立区社会教育関係団体補助金要綱 ・補助金データ資料、地区対H24・25実績 26事業計画 ・第14期社会教育委員会会議の今後の方向性、スケジュール
<p>【第2回】 平成27年 3月4日(水)</p>	<p>○足立区社会教育及び生涯学習の経緯・質疑応答、意見交換</p> <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・足立区生涯学習の流れについて
<p>【第3回】 平成27年 5月8日(金)</p>	<p>1 平成27年度社会教育関係団体への補助金の諮問 2 会議の検討内容に関する説明、質疑応答</p> <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・足立区社会教育関係団体補助金審議用資料 ・14期社会教育委員会会議での検討内容(案)
<p>【第4回】 平成27年 6月9日(火)</p>	<p>1 検討に関連する調査データの説明、質疑応答 2 青少年関係団体の現状と今後の方向性に関する報告検討</p> <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・足立区に関する各種データ調査結果一覧表 ・平成25年度 足立区の学校保健統計書(抜粋) ・平成25年度 体力・運動能力調査実施要項 ・平成25年度 東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣等調査(統一体力テスト)における足立区の体力・運動能力、生活・運動習慣等調査結果 ・平成26年度 小・中学校の体力・運動能力についての東京都との比較 ・平成26年度 全国学力・学習状況調査の調査結果 ・平成25年度 足立区少年補導白書 ・第2期あだち次世代育成支援行動計画策定のための調査報告書(概要版)

	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 22 年度 子どものための地域指導者養成体系構築事業報告書（抜粋） ・第 14 期社会教育委員会議第 4 回定例会での検討内容（案） ・足立区子どもの貧困対策検討会議（全体会）次第（配付資料 1～6） ・足立区教育大綱（案） ・地域との協働による「開かれた学校づくり」
<p>【第 5 回】 平成 27 年 7 月 7 日（火）</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 地域之力、地域資源を活かした体験活動 2 生活習慣、子どもの状況などを踏まえた体験活動 3 担い手である地域、青少年団体を巻き込んでいく体験活動 <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 5 回定例会議での検討内容
<p>【第 6 回】 平成 27 年 7 月 28 日（火）</p>	<p>○家庭の教育力を向上させるための方策、具体的取り組み</p> <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 6 回定例会での検討内容 ・（参考）既存の事業を活用した場合の事業展開（例） ・家庭教育支援の充実について（答申） ・足立区教育大綱（案）
<p>【第 7 回】 平成 27 年 9 月 8 日（火）</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 これまでの足立区の社会教育、生涯学習の取り組みの成果 2 「区長と第 14 期社会教育委員との意見交換会」 <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会教育委員会議第 7 回定例会議（9 月 8 日）での検討内容 ・足立区教育大綱（案）
<p>【第 8 回】 平成 28 年 3 月 22 日（火）</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 足立区教育大綱について 2 これまでの意見、提案などの再確認、成果まとめ 3 教育振興計画への活かし方 <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・足立教育大綱

開催日	審議内容・資料
<p>【第9回】 平成28年 5月31日(火)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 子どもの健康・生活実態調査について 2 足立区社会教育関係団体補助金について 3 平成28年度検討内容(案)について <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成27年度 子どもの健康・生活実態調査報告書(概要版) ・足立区社会教育関係団体補助金審議用資料 ・平成28年度社会教育委員会議について(案) ・新しいアウトリーチ型の家庭教育支援策(案)
<p>【第10回】 平成28年 6月20日(月)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 子どもの健康・生活実態調査の分析・検討 2 第2期あだち次世代育成支援行動計画策定調査 3 アウトリーチ型家庭教育の可能性、方法、場の提供 4 家庭教育支援の内容、対象と方法 <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・足立の教育 ・健やかな子どもの育成に向けて ・第2期あだち次世代育成支援行動計画策定のためのアンケート調査報告書(概要版) ・さいたま祖父母手帳
<p>【第11回】 平成28年 7月28日(火)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 今後の青少年期の家庭教育支援の在り方、現状と課題 2 青少年期における家庭教育支援で想定されること 3 親子食堂モデル事業の取り組みに向けて 4 新しいアウトリーチ型の家庭教育支援策モデル事業(案) <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第11回社会教育委員会議検討資料 ・新しいアウトリーチ型の家庭教育支援策モデル事業(案) ・「生涯学習施策に関する調査研究～関係機関と連携した家庭教育支援の取組及び地域における家庭教育支援の実施状況について～」調査報告書 平成27年度文部科学省委託調査 ・訪問型家庭教育支援の関係者のための手引き

開催日	審議内容・資料
<p>【第12回】 平成28年 9月23日(金)</p>	<p>1 足立区の家庭教育支援の方向性検討に向けた柱づくり 2 新しいアウトリーチ型の家庭教育支援策モデル事業(案)</p> <p><資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016年9月23日社会教育委員会議検討課題 ・子どもたちの未来をはぐくむ家庭教育 ・平成23年度「家庭教育支援の効果に関する調査研究」報告書(概要版) ・「平成24年度地域における家庭教育支援施策に関する調査研究」調査報告書 ・児童委員・主任児童委員の活用による児童健全育成及び家庭教育支援施策の推進 ・家庭教育に関する「学習プログラム」一覧 ・親子食堂事業の会場の現段階での想定
<p>【第13回】 平成28年 11月22日(火)</p>	<p>1 第14期足立区社会教育委員会議報告書案の検討 2 家庭教育支援の方向性など、会議総括について</p>